

「自律」の基礎に関する一考察

— B・ベッテルハイムの体験 —

実 松 宣 夫

Studies on the Foundation of Autonomy from

B. Bettelheim's Experiences

(1976年9月10受理)

は じ め に

本稿は、ドイツの強制収容所を体験した一人の精神分析学者ブルーノ・ベッテルハイム (Bruno Bettelheim 1903～) の体験に基づく人間理解、とりわけ人格に関する理論、そしてこの人格理論に基づいて展開されているところの重症の情緒障害児に対する治療教育実践、これら三者の中から、道徳教育の問題を考察していくうえで有益な視座を学びとらうとするものである。その意味で、道徳教育の具体的方法に関するものではない。

しかしながら、筆者には、彼の人間理解、人格理論を学ぶことに、(結果的に新しい理論ではなかったが、) 人間性を開示する新鮮な迫力を感じた。ベッテルハイムは強制収容所の囚人と情緒障害児という一見して何の関係もないように思える二つの問題が、実は、圧倒的な破壊的環境に対する同一形式の反応だと言うのである。両者が各々の現実に対処しているその形式とは、人格を破壊されて個人であることを忘れ、自己の自律心を捨て去るという「自滅」である。これは、彼らの経験した現実世界が、それほどまでにひどいものであったと言うことであるが、私達は、彼らのかかる世界経験から、「環境」というものについての学ぶべき教訓を受け取ることができるであろう。

彼らの経験した「環境」が、完全に拒否せねばならぬほどのものであったとすれば、これは逆接的証明として、「環境」に関する重要事項の存在を裏書きするものに他ならない。つまり、もし、「環境」に対する「或る見方」が、人間を自滅させるほどの人間性喪失を招くのであれば、これを阻止する何物かは、人格形成に重要な提言をなしうるものとなるであろう。

「環境」に対するこの「或る見方」、それを阻止する何物かを明らかにすることが本稿の主題である。その何物かを明らかにすることによって、人間性に対する洞察が深まることになれば、本稿もあながち道徳教育に無関係であるとも言えないであろう。

(なお、付記されねばならないことは、ベッテルハイムの専門内容が、今の筆者の力量では評価しえない領域であるため、彼の研究の中核を為す具体的な治療教育の実践内容には全く触れられていない、という致命的な欠陥のあることである。又、引用文献中の訳語は、邦訳されているものを使用させていただいた所が多い。)

第一章 ドイツ強制収容所の体験

強制収容所の残虐さは既に周知の事実であり多くを語る必要はないであろう。衣食住は不十分極まり、日曜日なしの17時間労働である。この強制収容所は1941年末、いわゆるヒトラーの「夜と霧」(Nacht und Nebel) 命令以後、大別して三類型となる。(一) 強制労働のための収容所。(二) 死のための収容所。(三) 両者の性格を持つ収容所。ベッテルハイムは1938～39年、ダッハウ (Dachau) とブッフェンワルト (Buchenwald) の収容所を体験したが、これは上記の(三)に所属する性格のものであった。

第一節 収容所への適応

収容所に入れられることになった囚人は、護送中に「洗礼」を受けた。長時間跪かせる、ざらざら光る物体を凝視させる、顔への平手打ち、腹部への蹴り上げ、さらには鞭、銃剣、発砲による殺人。信ずる神を呪わせられる、自分を非難させられる……。こうした、肉体と精神とに対する外傷 (traumatization) は全囚人に極度の恐怖心を引き起こした。肉体的な虐待、必理的怒りとそれを抑圧した絶望、によって囚人は疲労し、次第に、何が自分に起っているか不明瞭となる。「このような恐ろしい状態は、主体としての私には無く、ただ客体としての私にのみ起きています。」¹²⁰⁾ 現実との離脱感 (feeling of detachment) が新しい環境に適応する最初の心的対応であった。

既存の自己 (自己同一性 identity と言ってもよい) に対する破壊攻撃は、拘禁の「洗礼」に続いて収容所で終日行なわれることになった。囚人が虐待される方法は、丁度、「無力な子供が残忍で横暴な親に苛められる」¹²¹⁾ のに似ていた。その代表事例を列挙しておこう。

(一) 直接的に子供になることへの強制。囚人は人前で排泄を強要され、排泄の厳重な管理を受けた (排泄の許可と終了時の報告)。従って、看視兵の気分次第では、大小便の垂れ流しを余儀無くされることになる。このように、間接的に、いつ体罰を与えられるかしの不安の中の生活であった。

(二) 囚人に課された仕事。重い荷車に馬のようにつながれて駆けるよう命じられたり、重い石のある場所へ運び、次いでそれを元の場所に返す。など。こうした愚かな仕事や無意味な仕事の強制は、自尊心を極度に弱めた。

(三) 集団行動への強制。罰が集団単位に下されたため、個人は成人した大人としての自覚を持って行動することができなかった。反抗はもとより、自殺や殉教という消極的行為さえ、次の様にして弾圧されたのである。「或る囚人が他人を庇おうとして看視兵に見つかり、たいていは殺された。その行為が収容所首脳部に知れると、彼の集団全体が厳罰に処せられた。集団は他人を庇おうとする者を恨むようになったのである。……(庇う行為をなした者は) 個人としての尊敬の念を呼び起すことにはならなかった、又、自主性を讃える気持を抱くこともできなかった。さらに、たとえ生き残っても集団的抵抗の中心となるような英雄や指導者になれず、死んでも殉教者になれなかった。」¹²²⁾

第二節 自己放棄

極端な専制下であることに加えて、生活の基本的諸条件さえ欠落している状況下では、個人に対する環境の影響力が圧倒的となった。そして、この環境の力に人格が破壊されたように見える二群の囚人が生じる。その一は、古参囚人であり、その二は、「回教徒 Muselmänner」

と呼ばれた人々である。

古参囚人とは、過去の自己の人格を可能な限り再編成して、親衛隊や看視兵の気に入られるよう努力する人々である。どうすれば収容所内で楽に暮せるかが彼らの信条であり、生きるために最大限度、自己を環境に順応させようとしている。彼らは、新しい囚人が過去の自分を保持しようとして努力している姿と対象的である。収容所に憤り、身の不運を嘆く新しい囚人に対し、古参囚人は、自分が全能の父と認める新衛隊員に、善意を信じようとする心情さえ抱くに至るのである。

一方、「回教徒」とは、収容所の環境に順応しきること、過去の自己を守り通すことも、共にできぬという苦悩の末に自滅していった人々である。ここでの「回教徒」とは、真実のマホメット教徒ではない。肉体的、精神的、情緒的に疲労困憊した結果、自由意志で態度決定ができなくなり、環境に全てを委ねた人々を指す収容所内の用語である。足を引きづりながら歩く彼らは、数日を経ずして屍と化した。文字どおり「生ける屍」となったこの人々の心情を、ベッテルハイムは次の様に分析している。彼らが、あたかも何も考えず、何も感じないかのようにふるまい、そのうち、行動したり反応したりできなくなって死亡していくのは、あまりに非惨かつ屈辱的な自己しか感じられない環境の下で、環境と生命の双方に無関心になったからであると^{註4)}。後に見るであろうように、この無関心は、現在の苦痛を回避する自己防衛的な心理機構の産物である。しかし、同時に、この無関心は自己の放棄に連っていたのである。

この間の事情は、家族からの手紙に対する囚人の反応からも看取できる。手紙は「囚人の心に意気の昂揚と消沈とを同時に引き起こした。」^{註5)} 昂揚は、自分がまだ完全に忘れられてはいないことを知るからであり、消沈は、家長たる自己の喪失を知らされるからである。手紙の引き起こすこの矛盾感情は、心の負担を増大させた。そして、負担を負った感情は発散の場所が無いために、愛する者への怒りに転化するのである。しかし他方では、こうした怒りの不当性が承知されている。そのため罪悪感さえ生じてくる。結局、苦痛のみを生み出す感情の問題を解決するために、囚人は、家族に対する関心を抑圧して感情的結び付きを断とうとするのである。これは心理的防衛の結果なのであるが、同時に、生きる力の最大の源泉となるものを失うことともなったのである。

自己同一性を否定する破壊的環境とそこから与えられる苦痛のみの感情。これは個人であり続けることを困難にした。自己の意志に反して決定され、自己の感情に反しての行動が強制される時、囚人は自から意志することを止め、感情を抱くことを中止した。そして、さらには、観察や判断の基礎である知覚能力の衰退さえ生じたのである。「真に極端な環境は、まず自発的な行動（環境への抵抗と修正）を阻止し、次に環境から来る一切の刺激に対し、自分自身の人格から反応することを阻止する（内的変化）、そして最後には、個人的な内的反応さえ伴わないで、環境が押しつける行動が全てになる。この最後の段階は、まず、反応が消滅し、次に知覚の消滅にまで至る。そこに待っているものは死だけである。」^{註6)}これが「回教徒」である。

第三節 環境の力

ベッテルハイムは、古典的精神分析学が「環境」の持つ人格形成力を軽視していると考えている。今はこの問題に立ち入ることができないので、一つの事例で^{註7)}、人格に及ぼす環境の力を、再度考察しておこう。

国家社会主義（ナチス）の運動に強く反対している父親のもとで育った一人の少女は、自然

に国家社会主義が嫌いになった。ところが、彼女の学校ではナチス式敬礼が強制されたのである。頭初、彼女は心の中でおまじないをし、自分は本気でやっていないからこの敬礼は無効だと言いきかせた。しかし時と共に、このようにして自尊心を維持しながら表面を取り繕うことが困難となり、とうとう内心の抵抗を止めて素直に忠誠を誓うようになったというのである。父親は旧来の態度を変えず、彼の立場で真実の忠告や助言を与えたため、彼女の内心では葛藤が高まり、とうとう父親のために自分にかかる苦しみを味わうのだとの思いさえ生じ、かつてはそこから学んだ価値基準を恨むようになってしまったと。

ここで明らかなことは、闘いが、父親の価値観を背にした彼女と国家との間で行われるのではなく、彼女自身の内面的葛藤に歪曲化されているのである。父親は既に彼女の葛藤の局外者であり、彼女は一人でこの苦しみを解決せねばならない。その際、苦しみの元凶である国家を憎むのではなく（国家も憎まれるのであるが、それ以上に）葛藤に苦しんでいる自己の感情の処理に、より強く関心が移っているのである。人は長期の自己嫌悪に耐えきれず、次第に現在の自分を正当化して苦痛を解決しようとする。少女の場合、これは国家社会主義への適応に他ならない。

第四節 自 己 の 力

環境は、個人の人格に対して絶対的な力を行使することがある。強制収容所のような極限状況 (**extreme situation**) 下ではこれは明白である。それでは、人間は結局のところ、環境の被造物ということになるのであろうか。人間の「自由」など、つまるところは無力な位置に留め置かれるべきものなのであろうか。

この命題の反証の一つとして、次にベッテルハイムの体験を挙げてみたい。確かに、環境の力は絶対的ともなりうる。しかし、明白なその絶対力も、諸々の条件によって緩和されることは可能なのである。たとえば、外傷に対する心の準備、その人の人格統合の強度、そしてとりわけ次の文章で述べられている確信の有無。「何をしようと、どんなに努力しようと、環境からプラスの反応を引き出すことはできないと信じ込むか、否か。」^{註6)} この確信は次の様に言い換えることもできよう。「何とかして自主的な行動分野を維持できまいか、自分の生活の重要な分野を支配し続けることはできまいか。」^{註7)}

収容所における自主的な行動分野とは、一般的には非常に惨めなものである。「……生きたいのなら道は一つだ。食べられるものなら何時でも何でも食べようとする事だ。どんなに胸がむかづいていても、そんな事は気にかけてはいけない。糞だって、する機会がある時はどんな時でもすることだ。そうすれば、自分の身体がちゃんと動いていることがわかる。そして少しでも暇があれば、下らぬおしゃべりなんかしないで、一人で本を読むか、それとも横になって寝ることだ。」^{註8)} この発言の内容を、ベッテルハイムは次のように要約している。「生き延びるためには、条件は極めて不利だが、行動と思想との何らかの自由な領域を、たとえどんなに小さな領域でも、切り開く必要がある。能動と受動のこの二つの自由は、最も基本的な人間の二つの態度であり、摂取と排泄、精神活動と休息は、人間の最も基本的な活動である」^{註9)} と。

これらは最底の自主的領野と言えよう。これに加えて、ベッテルハイムの自主的な行動領域を保障することになった特殊な条件がある。それは、彼が囚人の行動を介して、その特異な心理を観察することに興味を抱いたという事実である。「私の眼前に展開する諸現象を観察し、現解しようとする。これこそ、私に、私自身の生活がなお依然として価値あるものであり、かって私に自尊心を与えた学問的関心を、私が失ったわけではないことを信じさせてくれ

たものであり、又、そのおかげで私は収容所の生活に耐えることができたのである。」^{註94}囚人観察が「自分の責任で、自分が何か建設的なことをやっている」^{註95}という思いを生み出し、それが気持の上で大きな救いとなったと報告されている。そんなことが何の役に立つのかと曝く絶望感と闘いつつ、今のこの精神分析を将来のために記憶するという課題さえ課することができたのである。

こうした自分の体験を通して、ベッテルハイムは「自己」に残された「最後の自由」について発言する。「生ける屍としてではなく、人間として、いかに卑しめられ蔑まれても、やはり一個の人間として生き延びるためには、なによりもまず、自分の最後の一線がどこにあるか……を明白に知らねばならない。」^{註96}この一線は人により、同じ人でも時により変化することは否めない。そのためこの一線が限りなく後退させられることも起こりうる。服従を強制されて反抗が死を意味する状況下での一線とは、次の様なものである。「服従についてどう感じるかを自覚していること。」^{註97}収容所の囚人の例で言えば、「自分は、もし生き延びようとするれば、自己を卑しめる非道徳的的命令にも従わねばならないが、また同時に、それに従う理由が『人間としては変らないまま生き延びる』にある事を自覚していなければならない。」^{註98}自己の行動のこの自覚、換言すれば、自己の行動から少しでも距離を取り、その行動の性質についてさまざまに感じる自由こそ、（この自由も、要求された行為を変えることはできなかったが）ともかく囚人をして人間であり続けることを可能にしたものなのである。そうだとすれば上記の「回教徒」は、自己の行動の自覚という最後の一線を放棄した人々の結末に他ならない。

第五節 自滅の意味

死ぬことが明らかであるガス室に歩いていく囚人、自分の墓穴を掘ってその前に並び、銃殺される囚人、（程度の差こそあれ、当時の一般的国民大衆）もまた、「回教徒」と同様、自滅していった人々と言うことができる。彼らの従順さは何に由来しているのか。疑いもなく、それは敗北感、無力感である。

しかしこの敗北感には、圧制者に対する敵意が無いのではない。弱さや服従には公然たる反抗より以上の敵意が隠されていることがよくある。抵抗しないで抑圧されている人々の敵意は攻撃行為で発散されないうちに内部に蓄積されていくのである。いわゆる心の負担が重くなる時、怒りは正当に表現されるのではなく、他に逸れる。つまり「自己」に向かうのである。こうして敵意が深まれば深まるほど、その抑圧により多量のエネルギーを要し、その結果ますます強い敗北感に陥ることとなるのである。

いかなる虐待にも従順に従っていった人々のあの無為は、外圧の強大さの故とはいえ、その時、彼らには自己決定の「力」が残されていなかったためであると言えるだろう。彼らは既に、生きることに絶望し死を望むようになっていたのである。黙ってガス室に歩いていくことは一種の自殺である。これが普通の自殺と違うのは、決意したり計画したりするのに必要なエネルギーを一切必要としない自殺であるという点である。「死の収容所のほとんどの収人は、抵抗せずに、死を甘受することによって自殺したのである。」^{註99}「人間は蟻ではない。彼らは蟻のように生きるよりも、むしろ死を選んだのである。これこそ親衛隊の犠牲者が、自ら死におもむいた事実がもつ深い意味である。親衛隊が彼らを殺したということは、彼らがもはや人間的でなくなった生を諦め、自ら死を選んだということに比較すれば、その重要性は小さいと言

えよう。』^{註(1)}ここに結論は明白である。人々は人間らしく生きるために、自滅の道を選び取っていたことになる。ところが、この逆接的な選択を為したのは、収容所内外の人々のみでは無かったのである。

注(1). Individual and Mass Behavior in Extrem Situations. from Journal of Abnormal and Social Psychology, (1943), p.431

注(2). The Informed Heart. p. 131. 以下同書。 注(3). p. 139

注(4). p. 151-3 注(5). p.159 注(6). p. 156 注(7). p. 290-3

注(8). p. 147 注(9). p. 147. 注(10). p. 147-8 注(11). p. 148

注(12). p. 111 注(13). p. 115 注(14). p. 157 注(15). p. 158

注(16). p. 158 注(17). p. 250-1 注(18). p. 300

第二章 自閉児治療の体験

ベッテルハイムは強制収容所を釈放されるとすぐにアメリカへ移住した。そしてそこで、強制収容所とは正反対の「環境」を体験したのである。この二つの環境体験を反省しながら、彼は独自の精神分析理論を構築する。そして、この理論に基づいて幼児の精神治療を開始した。その実践の舞台が、彼の思想によって設立され運営されているシカゴ大学附属の養護学校 (Sonia Schankman Orthogenic School) である。この学校での研究成果は数多く発表されているが、本稿では、前章との関連で彼の思想が展開されていることが明白な、自閉症児の治療分析に対象を限定する。

第一節 自己の成立

その(一)、授乳期

「私」という感情、この「自己意識 self-awareness」というものは、いかにして生じるのであろうか。心理学は乳児の知覚の発達過程を詳細に報告している。確かに「自己意識」は、他者に対する知覚として自覚される側面があるであろう。しかし、単に事物を観察したり注意したりする能力とは相対的に異なるもので、むしろ、独自の能動的体験を為す能力とより密接な関連を持つものとベッテルハイムは理解する。生後始めて為される世界との交渉を、乳児が内的にいかなるものとして体験するのかという行為的、情緒的な側面が重要であると。

ともあれ、世界との交渉体験で最始のかつ最も重要なものは、「授乳」とそれをめぐる出来事である。この授乳期における「自己」の意識化の歩みを、「泣く」ことを事例として概観して見ることにしよう。

乳児が何故「泣く」かの原因説明はここでは問わない。重要なのは「泣く」ことが、子供の積極的な能動的行為 (たとえ本能的運動と呼ばれるにせよ) であるという点である。「泣き声」に対して母親は、わが子がいかなる状況下にあるかを想像し、それに応じた反応を示す。これを乳児より見れば、「泣く」ことに対する反応がいろいろあることの学習に他ならない。彼は、取り扱い方法にいろいろあることから、不快感にもいろいろあることを体験しよう。神経系統の分岐と共に、全体としての漠然とした不快感は減少し、それが身体の一部に鋭く感じられてくる。感覚身体自我 (body ego) の成立である。「泣く」その他の乳児の感情表現は、こうして一つの出来事の信号であることが両者間で承認されてくる。この信号は、母親の賢明な取り扱いによって次第に精密に規定され、それと同時に、乳児は自己の欲求をより明

白に意識化することができるようになる。まだこの段階では、正確な意味での「自己意識」（他人として認知している相手から、何物かを獲得しようと意識して行動できる存在が所有している感情）はない。ただ快感を得て不快を避け、対象を観察し注目している存在者である。しかしながら、ともかく、欲求が常に満たされるものではないという経験が蓄積し、その時の欲求不満を操作しているうちに、外界の存在が次第に明白化し、それと同時に「自己」を知ることになっているのである。

外界は、母親とその取り扱いを介して乳児にもたらされる。乳児は母親の対応によって外界を知り「自己」を知るのであり、その意味では、母子一体の共同生活が存在すると言えるかもしれない。しかし、母子一体のこの共同生活において、既に、「独立していく個性化 (individuation)」の歩みが進行しているのである。授乳の体験が「自分の力をもって行動したという体験、完全に自己を発揮したことで相手に認めてもらった体験、他の点では相手に依存しているが、この新しい体験を確認したという体験」^{註98)}、として乳児に感じられるか否か、又、その程度はどれほどであるか。これこそ、乳児が将来抱くであろう自己と他者に対する感情の原質であるとベッテルハイムは理解する。従って、授乳で大切なことは、・ただ食事を与え、必要だから抱き上げる。いろいろに取り扱うということではない。(人口栄養の時間授乳の否定。) もちろんこれらのことは大切である。しかしより大切なのは、乳児が「泣く」ことによって、「彼自身のタイミングにより、他者から食事が与えられ、彼自身が満足する」^{註99)} という体験をすることである。

要約すれば、「自己」の意識化は、まず最初に、「自己」という能動性あるものの情緒的な所有体験があって、次にそれが外界の何かの反応と結合する必要がある。人格の発達は「第一に、自分の力で他者と交渉を持ち、自己と他者との最小限の区別が可能となる。第二に、この漠然とした区別が、他者との交渉を重ねるうちにより明白化する」^{註100)} という過程で進むのである。

その二 排泄期

授乳期に次いで精神分析学が重視するのは、「排泄期」である。この時期の特色は、「自律 (Autonomy)」の確立が明白となることである。自己の能動的な運動感情を「自律」と呼べば、「自律」は、自己の萌芽の瞬間から成立しているわけで、授乳期にすでに発動している。たとえば、授乳の際に「大切なもの、欲しいものが、必ずしも自分のものではない」という体験は、まだ、自己の内容を積極的に与えるものではないが、ともかく、自己と他者との分離という体験を通して、自己の運動していることは認められている。母子の感情交流に、早期から乳児がどれほど積極的であり、自主的参加が許され、又、そのことでどの程度満足したかが大切なもの、これらのことが乳児の「自律」と関係するからである。しかし、未だ授乳期には「私」という感情、自から何かを為しうる自己が体験される根源はない。

自己の意識が強まるのは、まさしく、「排泄」をめぐる乳幼児の行為を媒介としてである。確かに、排泄訓練も、広く展望されるならば、自己を他者から区別することを意識化させる数多い乳幼児体験の一つである。しかし、「私であったものを排出して、私でないものにする」という体験は、自己と他者との間に明確な境界線を提示する。これに加えて、「自力で或ることを為した」という明白な能動的体験がある。乳幼児は、「排泄」という能動的にならざるをえない行為を通して、始めて、意識的な目的指向的行為 (goal-directed action) と生理的行動とを結合するのである。身体機能に対するこの支配権の獲得こそ、「自律」の内実に他ならない。

第二節 自閉症児

小児自閉症 (infantile autism) とは、一般的には、言語を持つ以前の段階にいる乳幼児が、現実生きることに背を向けて自閉化する精神病のことである。こうした子供達は、他の多くの仲間が自己意識を発達させて自律心を強化していく時期に至り、ようやくその人格発達の異常さが看取されるのである。彼らが生き続けた場合、「現実との接触、交流という点では、赤ん坊同様に孤立しているのに、身体的発達ははるかに進んだ児童」^{註68)} が育つことになる。従って、回復した自閉症児は、正常な人格発達の裏面を物語る生証人である。

自閉の発生は、乳幼児の自由な運動能力が増大する時と同じである。この時期、乳幼児は身体的変化が著しく、そのため外界に対する感受性も著しく高まる。いわゆる「転換期 (critical period)」であるが、ベッテルハイムは試案としながらも、これを三期に分けている^{註69)}。

第一期。生後の6カ月間。「8カ月めの人見知り」が始まるまでの時期。つまり、世界に対する敵と味方の分離が正常に進行する前の段階の時期である。この時期には、世界が本質的に善意に満ちているという体験が為されねばならない。

第二期。6カ月から9カ月。この時期に世界は二色に塗り分けられる。他人が個人として認識されると同時に、自己を自己として認めることもできるようになる。他人と交渉をもつことになるこの時期に、交渉内容がいかなる質のものとなるかは重大である。

第三期。18カ月から24カ月。言語が発生し歩行可能となる時期である。従って、子供は単に情緒的のみならず、実際的にも、世界に接近したり逃亡したりできるようになる。排泄の練習が始まるのもこの時期であり、自閉児の好発期である。

阻害される可能な内容は、第一期では「子供の能動性一般」であり、第二期では「他者への能動的接近」であり、第三期では「世界を取り仕切ろうとする能動的 努力」である^{註70)}。いずれの時期にあっても、自己の能動性が阻止されて生じる無気力が、自閉の原因であると推定されている。

次に、現実から逃避し、行動することを中止した子供達の「類型」を概観しておこう。この「類型」は自閉化の軽重の程度でもあり（その意味では過程）であるというのがベッテルハイムの理解である。^{註71)}

(一)、環境に全く働きかけない個人。彼らは内的及び外的な現実認識から、全てのカセクシスを喪失している

(二)、環境とは交渉をもたないが或る程度の行動力をもつ個人。彼らは自分に自然な興味や気持から行動したり、環境の現実即して行動することは少ないが、実際の必要性が迫るとその不安から行動する。つまり、環境からのカセクシスは喪失しているが、内面的な心理に基づいては行動できるのである。

(三) 環境に対して死闘を続ける個人。彼らは行動するが、それはカセクシス過大となった内面的心理に基づいている。彼らの現実理解は倒錯し、人格は深刻に犯されているが、その程度は全体として行動能力を喪失するほど著しくない。

第三節 自閉化の心的機構

自閉児の内面的心境とはいかなるものであろうか。彼らが自閉化するには何かの理由があったはずであるが、そこにはどういう人間的意味があるのであろうか。又、自閉化する必要性、必然性とでも呼びうるものがあるとすれば、それは何であらうか。

これまで既に、自閉児の心を占めているものは無気力であると言及されている。しかしこの無気力は、「世界に対する根源的無力感」と呼びなおされなければならない。それは単なる無気力ではなく、「世界に対して何もすることはできない、又、世界は欲求充足の場ではなく、破滅的破壊的な場所である、という信念」^{註68}の産物とでもみなされるべきものである。

子供達に、それほどまでの無力かつ破壊的な信念を生じさせたものは何か。言うまでもなく、それは子供達に見えたところの世界である。この世界が強力で圧倒的な性格を有し、加えて、彼らに破壊的な作用をしたのである。さらに加えて、この恐怖の世界は、何時終るとも、どうすれば回避できるとも予想できなかつたに違いない。「極限状況」としか称しようのない世界であろうとベッテルハイムはいうのである。「極限状況」に、完全に打ちのめされたという脅威感から、身動きできなくなったのが「根源的な無力感」である。

ベッテルハイムのこの推論に従うと、自閉児の抱いている無力感とは、それに先立って「他者との交渉過程」が存在したと考えるべきである。この交渉において「深刻な打撃」を受けた「結果」、無力感が生じたのである。そのための原因は二つある。一は、子供の「自己」が見た世界が、客観的に破壊的な性格を有する「極限状況」であり、そこからの信号を彼が正確に受け取ったために「深刻な打撃」を結果する場合である。その二は、世界が主観的に破壊的と評価される場合である。両者は密接に関連している。しかし内的生命からの信号によって、客観世界の信号を誤読することもありうるのである。ともかく、いずれかの信号によって、一度、子供の内面に「圧倒的な不安」が生じると、これが逆に世界との交渉の失敗の原因となり、こうして、精神的な不均衡と外界交渉の失敗とが悪循環して、いよいよ無力感が深刻になっていくのである。

ともあれ、完全に打ちのめされて、「世界に対する根源的無力感」の虜になっている自閉児は、「目的」を抱いて行動するはおろか、行為の「予測」さえできない状況であろう。行動理論的に考えれば、「目的」とは、自分の行為の結果を握ることに基づいており、「予測」とは、可能な自己の行為の変容度を測定することである。こうした「目的」「予測」ができないということは、一口に言って、目的指向の行動の欠落である。しかしそれに終わらない。「目的」「予測」ができないということは、未来がないと同時に過去がなく現在もないということである。これでは事件の因果系列のどこに自己が確認できるであろうか。彼は、次々と我身にふりかかる事件に、ただ曝されるしかない。自己の予測を越えた世界から事件が生じ、しかもそれが破壊的にのみ作用する時、残された唯一の道は、世界との関係を遮断して世界からの刺激を受けないようにすることであろう。何もしないのが一番良いのである。これは、環境に対して、それを操作する自己の側の完全な敗北を意味する。何もせず、何も起こらなれば人生は無いのであるが、この虚無の空間を創り出し、そこに入って生き続けようとするのが自閉症児なのである。

しかし、行動はおろか「予測」すらなきに、従って、事件の間の「秩序づけ」もなされていまいというこの徹底した活動放棄は、かえって逆に一つの意志を感じさせる。つまり、単に無為に安んじようとする態度ではなくて、むしろ、危険な状況を防衛的に阻止しようとする、積極的な反応行動なのではあるまいか。逆接的であるが、ベッテルハイムは、自閉児の中に「何も起らないという否定的予測に従って、物事を秩序づけよう」^{註69}とする意志を看取するのである。つまり、彼らは、行動に対する正常人の「予測」、事件の「秩序づけ」とは正反対の方向において、自己の行為を正当化する「秩序づけ」に努力していると言うのである。自閉症

児の同一性保持 (sameness), (これは上記第二類に所属する自閉症児の示す、無意味な単調作業のことである) についてのベッテルハイムの分析を見てみよう。

「これは物事に秩序をつけようとする態度であって、事件の生起する法則を確立しようとする努力に他ならない。」^{註19)} 同一性の永遠の保持は、物事はいろいろに変わり得るという希望を与えないかわりに、失望ももたらさない。これが彼らにとって救いなのである。変化は、それがどんなに些細でも、希望を抱かせる可能性と、他方では状態悪化の危険とを含んでいる。悪化の危険はどうあっても避けられねばならない故に、変化のない永遠の法則が、自閉症児側で創り出されることになったのである。つまり、彼らは、変化をもたらしなすために、敢えて何もしないことが最良の策であると信じ込んでいるのである。自閉症児には、「状況を喚起する行動のかわりに、状況の発生を阻止する行動のみがある。」^{註20)} しかしながら、この無為によって防衛されるはずであった自己の「自律」は、逆に、より一層衰弱することになるのである。私達は、自己を維持するための無為の決定で、逆に自滅していった人々を、既に知っている。

第四節 「回教徒」と自閉症児

ドイツの強制収容所に見られた「回教徒」と、乳幼児の精神病である小児自閉症児との間には、奇妙に一致する信念がある。「このような不合理かつ不測な世界に住むことについて、最も良い方法でかつ唯一の救いは、何もしないことである」^{註21)} というのがその信念である。

確かに相違も明白である。収容所の囚人は知能の発達した成人であり、彼らの「極限状況」は政治的強制によっている。いわば外圧による自閉である。これに対し、自閉症児の場合は、年端も行かぬ乳幼児であり、彼らはその人間性が現実化するより以前に、世界から逃亡しているのである。いわば自然的逃避である。しかし、この逃避も、この年令の子供の根源的な自己中心性を考慮すれば、彼らには、まだ自己と外界との境界線が不明瞭のため、外界にあるものを即ち自己の行動によるものと思い込んだ結果の自閉となる。そうだとすれば、収容所の囚人も自閉症児も、「世界に対する体験」としては同一のことが生起しているのである。

収容所の囚人にとって、環境はあまりに暴力的かつ破壊的であった。彼らは生きるために、無法な環境に適応しようと自己の人格を再編成したのである。この再編成は、既存の人格を崩壊し墮落させねば不可能であった。この時、囚人を苦しめたものは、外界からの破壊的刺激もさることながら、内面から来る敵意をどう処理するかという問題である。この苦しみに対し、内外からの刺激を拒否するため、感受性を捨てることによって対処しようとしたのが「回教徒」である。彼らの決定は、苦しみを緩和しようとしたものであったが、同時に個性の放棄でもあったのである。この心的過程は、そのまま自閉症児に適用できるように思える。乳幼児の場合は、世界が世界として自覚されるまでにまだ至っていないだけに、むしろ、自滅のこの決定はより容易であるとも言えるだろう。子供の分裂症を創るには、「その子供が、自分の生命は、彼の生死を絶対的に支配しようとしている不合理な暴力によって、操られていると信じ込ませるだけでよい^{註22)}」のである。

註19). The Empty Fortress. p. 19. (邦訳、「自閉症. うつろな塔」みすず書房) 以下同書。

註20). p.25 註21). p.24 註22). p.4 註23). p.46-7 註24). p.47

註25). p.75-6 註26). p.46 註27). p.54 註28). p.83 註29). p.54

註30). p.74 註31). p68

第三章 教育学的総括

私達はこれまで、人格が破壊され、自己の健全な成長が阻止される二つの具体例を見てきた。この事例から、いかなる教育的教訓を引き出すことができるであろうか。教育学的に建設的な成果をまとめる意味から、今一度、問題を総合的に考察してみよう。

第一節 能動的体験

自己の発展、人格の向上を促す体験とは、いかなる性格を有するものであろうか。

既に見たことから明瞭であることは、成人した大人であれ、未熟な乳幼児であれ、もし彼らが、何時、どのようにすれば、世界を変更できるかが決定できない時、そして、世界に対して影響を与えることができないとの体験を為す時、人格は、(破壊のとまでは行かずとも)有害な変形作用を受けているのである。昆虫や動物ならば、世界との交渉におけるこうした内的体験は問題とならないであろう。しかし、人間には次の体験を為すことが、又、為し続けていくことが、人格形成にとって不可避なのである。「私はそれを為した、そして私の行為で変化を生じた。(I did it, and my doing made a difference.)」¹⁸⁾。非常に簡明な命題であるが、ベッテルハイムの理解では、人間に独自の体験とはこの命題に還元されるものである。さまざまな解釈が可能なこの命題を、これまでの私達の論旨に沿って考察すれば、次のように言うことができるであろう。この命題は、自分のやり方で働きかければ、物事に、又その経過に、何らかの影響を与えることができるという能動的な体験感情の表明であると。あるいは、事件の因果系列に、自分は新しい環を挿入することができるという確信であるとも言えよう。ともかく、ここには、「私」というもの、「私の働きかけ」、「働きかけの対象」があり、「私」と「対象」との間に、「働きかけ」に対応した「内容」がある。こうした応答の「交渉」こそ、能動的な内的体験の内実には他ならない。

一例を挙げよう。私達は先に、乳児が「泣く」ことにより「彼自身のタイミングで、他者から食事が与えられ、彼自身が満足する」という体験をすることの重要性に触れた。ここには、感情を伝える(相手に自発的に働きかける)、そしてそれにより、相手の適切な感情的反応を受け取る(反応を引き出しそれに満足する)という営みが為されている。この体験の重要さは、乳児の主体的な行為を通して、彼が「自力で生活を変えていくことができる」、「自分の運命を担っている」という人生を切り開く確信の獲得に連なる点にある。「私はそれを為した、そして私の行為で変化を生じた」という体験が、人間性を形造る構成要件なのである。

逆に今、この能動的体験の欠落している状況を考えてみよう。これは、これまで再三にわたって私達が見た自閉化の心的機構であろう。そこでは、「私」は、対象に対して何らの「働きかけ」もできないと確信しているため、積極的、能動的な営みは中止され、「働きかけ」一般に対する注意が弱まって無力感が支配的となっている。この無力感が完全に支配的となる以前に、世界との間で何程かの満足を体験した「交渉」があれば、過去の幻想が必死に固守されることになるうし、不幸にしてこの幻想さえ許されなかった場合には、「世界は存在しない」という確信を生じるであろう。「私(自己)」の能動的体験を否定する状況に、関心は向かない。向いても持続することはありえない。たとえ、対象となるものが、客観的にはどんなに驚異に値するものであろうとも、である。

予測を立てても如何ともしがたい事態、それに対する準備や変化ができないような状況では

「自己」の関与する余地がないため、「自己」とは全く別次元の法則支配を承認せねばならない。世界の与える（与えると思われた）信号によって引き起こされた恐怖や不安のあまり、能動的行為を最も完全に放棄した人々こそ、自滅していく「回教徒」であり、小児自閉症の子供達であったのである。事件の因果系列に、自分が新しい環を挿入することができるという体験こそ、「自己」が芽ばえる基底感情である。この体験、この感情に支えられて、その上に成立するものが、「自由の意識」「自尊心」「自律心」などである。

次に、能動的体験を二つの側面から考察してみよう。その一は、人間は（乳児も）自分の意志で能動的にならねばならぬということである。その際、たとえ、誰人かが援助の手を差し伸べて、能動的になる口火を創ってくれることはあるかもしれない、又、援助の手が必要であることもあるにせよ、である。この第一の側面は、ベッテルハイムの学校のかつての患児が、当時を回想した発言に明瞭である。「恐怖、欲望、憎悪などに対する戦いのため、私の感情エネルギーは燃え尽くされていた。……自己を変え、自らのエネルギーを正しくかつ創造的な方向に向けるに至った過程は、全て、自らの直接的対決による外はなかった。誰でも、自分自らそうしようと希うのでなければ、決して自己を変えることはできません」。^{註99}ベッテルハイムが乳児期の最初から「独立していく個性化」の視点を重要視するのも、これと軌を一にする。乳児は一人だけで生きることはできず、一人だけで活動するのでもない。彼の生活は常に他者との間柄に係わっており、母子の親密な関係が前提とされねばならないが、この親密な関係さえあれば、それだけで乳児が活発になるのでもない。人間の生活は他者との関係抜きにはありえないが、生活の始まりは自己自身の力で生きることにあるのである。

第二の側面は、世界における他者との「交渉」の重要性である。人格が確立するには、他者との「交渉」を媒介とせねばならない。これも再三確認されたことである。そして、自から能動的となるという第一の側面さえ、よく見ると、すでに他者との「交渉」が内包されているのである。

このことは、たとえば、「交渉」を断って、対象を媒介しない自閉の世界で行なわれるところの自閉児の同一性保持の運動が、その真実は「状況の発生を阻止する（ための）行動」である、という事例で明瞭である。彼らは、敢えて何もしないことを最良の策と確信し、「何か変化が起こるかもしれないという希望は持つべきでない」^{註100}という信条に従って世界を秩序づけている。しかし、これは、視点を変更して見ると、対象との「交渉」を獲得しようとするものがきであり、あがきに他ならない。必死になって対象を捕え、「交渉」を願っているのであるが、彼らの希望するような不変の永遠法則に従って身の安全を保障するような対象が、現実には存在しないため、虚空のうちに対象を追究することになっているのである。

「自己」の能動的な「交渉」体験から、人格を構成する諸要因が発達していくのは、次のような事例を見ても明瞭である。たとえば、言語が発達するのは、誰人かに話しかけたいからであり、人の話すのを理解したいからである。感情の分化や洗練さも、共感をもって反応してくれる相手を前提としている。思考が最小のエネルギー消費で行動の結果を予測することであれば、人間関係への思考は、最少の犠牲で社会的行動の結果を吟味することと言えるだろう。人間とは、「少なくとも、能動的な行為を通して、永久に、他者に対して自己確認を続けねばならない」^{註101}存在なのである。

第二節 自律, 決定, 自己

「自律」の基礎が、能動性とそれに対応した事柄の変化の体験であることは、既に言及された。この「自律」意識が急激に高まるのは、「変化が生じた」という漠然とした体験感情から「私(自己)」の行為によって、「変化を生じさせる」という決意の態勢に転換する時である。

これは、排泄期の幼児体験において明瞭であった。それまで「自己」の一部であったものが、突如として自分のもので無くなるという体験は、幼児が「自己」の感情を意識する強力な動機となる。そこで行為を為すのは、他の誰人でもない、「自己」なのである。さらに、この自己行為は生理的緊張を解放して満足感を与える。能動的体験は、ここで明白にその姿を現わしている。

一般に、身体的機能の支配は「自律」の強化と密接な関係がある。しかし、排泄はさらに、身体に対する「自律」のみならず、社会的(人間関係)「自律」をも強化するのである。これは、排泄をめぐる母子の感情交流を見れば明白である。じょうずな排泄が母親を喜ばせるということは、自分の意志で他人を操作する自由を獲得したことに他ならない。幼児は、排便の始めと終りを報告して満足する一時期を経過するのである。

このように、身体は、自己の「自律」を感じる最も手近かな対象である。乳幼児は自分の身体を操作することに習熟しなければならない。これは、私達大人の考えていること、つまり、「自律」とは自分を支配する内的能力である、という理解と同一線上にあるものである。しかしながら、ここで注意されねばならぬことは、身体に対する操作の自由を獲得するということだが、そのまま、身体的欲求は全て精神的制御の下に服従させられねばならないということになるのでは無いということである。「自律」は身体操作可能性を要求するが、それは絶対的なものではない。身体的感情は、勝光と同様、満足や放出への権利を自由に主張できねばならぬとベッテルハイムは考えている。^{註69} 従って、身体操作、感情の統制を「自律」と結合するとしても、その程度は「十分」でよいのである。

さて、事件の因果系列に「変化を生じさせる」という先の態勢を、今一度考察してみよう。「変化を生じさせる」という態勢は、「変化が生じる」という体験が前提であり、それに基づいて変化を願う「自己」が、行為を「決定」するということであろう。つまり「予測」に基づく「決定」による行為の結果を、「自己」が所有するという確信に他ならない。これまで見てきたように、行為の結果が何の変化も生じさせないとすれば、「自己」は無力感に浸るであろう。しかし、行為に着手し始める時に、「決定」ができない状況を想定すれば、その時の無力感にはるかにより深刻なはずである。「自律」は、「自己」の行為で変化を生じたその結果の報賞として確認されると同時に、「変化を生じさせる」行為に「決定(決意)」する時点で、より強烈に体験されるものなのである。従って、自分に重要な決定事項に参加できないことは、人格に破壊的に作用する。「自律感」とは、「重要な決定をすることができるという信念、しかも一番大切な時にそうすることができるという信念」^{註70} に依存しているのである。

自分にとって重要な決定事項への参加が阻止されているという感情が生じるのは、自然的、社会的な環境の劣悪な時のみとは限らない。逆に、環境が万事御膳立てしてくれるため、能動性を発揮する必要が無い時でも同様である。両親が全ての重要な決定を為してくれる子供の場合がこれであるが、そこでは、精神力を意志決定に費すことが無駄なのである。「個人の決定なしに事を処理するのは、たとえ目的が、良くても、望ましいことではない」。^{註71} 適度の感

欲求不満の体験が必要なのである。

「自律」が「決定」機能と密接な関連を持つということは、「自己」というものの実体を考えるうえで、少なからず重要である。「自己」が、変化を予測した「決定」の実行によって強化されるということは、この「決定」を行使しないと「自己」が弱体化するということでもある。これを「自己」に焦点を置いて見るならば、「自己」とは、固定的な一つの状態では無いということになる。「自己」は、一つの状態で無く、「決定」「行為」「反応の受理」という一連の過程と共に、強化されたり弱体化されたりするのである。つまり、「自己」とは「生成する過程 (process of becoming)²²⁸⁾」そのものであると考えざるをえない。従って「自己」は、常に二つの岐路に立つ。人格は良くも悪くも再編成されうるのであって、この二者択一は人生の終りまで止むことはない。この様に見てくると、「決定」とは、岐路に立っている「自己」に形態を与えることに他ならない。そこに迷いが生じ、危険が迫ることも少くないであろう。さらに、「決定」には常にエネルギーが必要である。こうした理由から「決定」は回避されやすい。ところが、「不幸なことには、決定を下すという機能は、丁度、神経や筋肉のように、使わなければ萎縮する」²²⁹⁾ ものなのである。

「回教徒」や死の収容所の囚人達は、自分の運命に対する「決定」を回避した瞬間から、実は、自滅の道を歩み出していたのである。しかし、人間には最後の自由があった。それは、「人間は、環境がどんなに人を束縛し、圧迫しても、それを評価する自由を持っていて、その評価に基づいて、自己に押しつけられたものを内的に是認するか、あるいは内的に抵抗するかを決定する自由を持っている。」²³⁰⁾ ことである。この最後の自由に対応した最後の「決定」が、人間はどこまでも決定するべく運命づけられていることを照し出す。「決定する」ということは、単なる自己の一機能ではなく、逆に自己を創り出す機能なのであり、又、一度創り出された自己を断えず発展させる機能でもある」²³¹⁾ のである。

(それでは、「自己」の「決定」は、実存主義者の言うように、全ての状況下、全ての時点で為され続けねばならないのであろうか。理論的にはそうであるが、ベッテルハイムの要求は、はるかにもっと慎ましやかである。「私の言う自律という概念は、人間の自己を支配する内的能力に関するもので……意識的な意味の探究に関係するものである。」²³²⁾ この「自律」は、「内的確信から生じる静かな行動」として表現される。平易な事例を挙げれば、身の安全と公共の福祉のために守る「スピード制限」がそうである。生命と環境との両刺激に対し、均衡ある解答を与える努力がここでの「自律」である。「自律」を最大限に拡大して考えれば、このように、「対立物の統一」に努める心情であると言えよう。この問題はともかくとして、「決定」は、対立する生命と環境との要求間で、又、それらの内化した欲求相互間で、為され続けていくのである。そうすることによって、「自己」は変貌しつつ維持されていくのであるが、ここに、人間の「自己同一性 identity」が成立するのである。)

最後に、ベッテルハイムの言う「自律的存在としての人間の核心」を取り上げておこう。彼は、それが自己同一性と、仕事に関係する幸福な感情とであると言う。「自己同一性、つまり、少数の他者との永続的で意味深い関連を持ち、自分が作り上げたと同時に、それによって自分自身が形成されたところの、一定の経歴を持った独自の人間であるという信念。個人的な経験、好きな仕事、好み、喜びなどについての思い出を伴った自己の仕事に対する尊敬の念と、その仕事をする事ができる喜び。」²³³⁾ ここには、自己決定に委ねられた人間の厳しいイロリズムは見られない。看取されるものは、直接的な人間関係を介した環境との交渉によって、基本的

「自律」の基礎に関する一考察

な人間関係を充実し、健康な労働に満足しているごく普通の人の姿である。その意味では教育も又、かかる基本的人間関係の充実を目的とするものに他ならないのである。

注⁽³²⁾. The Empty Fortress. p. 51. (以下 Fortressと略記)

注⁽³³⁾. Fortress. p. 9 注⁽³⁴⁾. Fortress. p84 注⁽³⁵⁾. Fortress. p. 81

注⁽³⁶⁾. Fortress. p. 49

注⁽³⁷⁾. The Intormed Heart. p. 69. (以下 Heartと略記)

注⁽³⁸⁾. Heart. p. 72 注⁽³⁹⁾. Fortress. p. 37 注⁽⁴⁰⁾. Heart. p70

注⁽⁴¹⁾. Heart. p. 69 注⁽⁴²⁾. Heart. p. 70 注⁽⁴³⁾. Heart. p72.

注⁽⁴⁴⁾. Heart. p. 73